39
分枝 branching 24
http://branching.jp
ブランチング 25 発刊 2018 年　6月9日
お問い合わせ・入稿先　system@branching.jp

場所のマグノリア

Kazunori KITAZAWA 1949~
北澤一伯

「そうです。マグノリアの木は寂静印です。」

宮澤賢治に「マグノリアの木」という短編がある。
おそらく山辛夷のことだろう。

すでに伐採されてしまった山辛夷の樹のことを思い出すことがある。
それによって、私の「氏族」の存在と結びつけられた「場所」の定位に、変容はあっても継続はあるのだという実感とともに、「土着」（ネイティヴ）という概念と共振するような感覚の流れを感じることが多い。

ラテン語源からみれば、「ネイティヴ」とは特定の場所に生まれ、したがってその場所に本来的な帰属をもつ人々のことを包括的に指ししめす、きわめてニュートラルな言葉だったという。

実際、それは近代科学のディスクールのなかでの人類学者たちのテクニカルな用語として使用されていたと私は思う。だが、都市社会から想定された地方の土地に、生まれ、育ち、住み、共同体に所属するということの、色彩に例えるなら混色と濁色をもふくむ陰影のある場所は、「地域」という言葉をともなう政治性によって、綺麗に脱色されてしまった荒野のようにみえる。

『ルイ　マランが「ユートピック」のなかで説いているように、修辞学の伝統においては、場所を示す「トポス」という用語には二つの意味があった。一つは「トピック」、すなわち修辞学的・詩学的な形式のことであり、もう一つは「トポログラフィー」、すなわちそれ自身の実体・一貫性をそなえ、「名前」を持った空間の断片のことである。ところが、いつのまにかわたしたちは「場所」（プレイス）という概念の近代的定位にむけて、それが本来内蔵していた修辞学的・詩学的力を無視し、もっぱら場所を実体的な空間と関連づけて認識する思考方法を発達させてきた。

そうした「トポログラフィーの思考」の犠牲になったのが「土着」（ネイティヴ）という概念だった。』（クレオール主義　今福龍太　）

巷で語られている綺麗な言い回しを誰しもが本当だと信用していないとしても、己の意見の真理性が揺るがないという宣言を語る権力者の彼らは、実は己の賞味期限を熟知し、適用範囲が限定されていると肝に銘じて語っているようである。それを政治性というのだろうか。

それに対する異論を語ることは、己の無能さ加減とともに立ち尽くすことだという自覚に託してマグノリアの樹を植樹する企画を実行しつつ、彼らとは異なる物質で思考してきた呻きにちかいものの伏流を、見える姿にすることである。

photo by Kazunori Kitazawa

場所のマグノリア / 石膏像頭部　コンクリート駐車場 / 9cm×9cm×10cm
物質誌　布置する台座　＜極東＞彫刻 / 松本市大手　マツモトアートセンター駐車場

北澤一伯 Kazunori Kitazawa
1949 年長野県伊那市生まれ　美術家

発表歴

北澤一伯 Kazunori Kitazawa
1949 年長野県伊那市生まれ
発表歴
1971 年から作品発表。74 年〈台座を失なった後、台座のかわりを、何が、するのか〉彫刻制作。
80 年より農村地形と〈場所〉論をテーマにインスタレーション「囲繞地（いにょうち）」制作。
94 年以後 2008 年 12 月までの約 14 年間、廃屋と旧家の内部を「こころの内部」に見立てて美術空間に変える『「丘」をめぐって　死んだ水うさぎ』連作を制作。同期間、長野県安曇市穂高にある民家に住みながら、その家の内部を「こころ内部」の動きに従って改修することで、「こころの闇」をトランスフォームする『「丘」～』連作「残伏の家」を制作。
　その他、彫刻制作の手法と理論による「脱構築」連作として
1998 年下伊那郡高森町「本島甲子男邸 36 時間プロジェクト」がある。地域美術界に対する新解釈として「いばるな物語」連作。
戦後の都市近郊における農業事情を読む「植林空間」。
　また、生家で体験した山林の境界や土地の権利をめぐる問題を、「境（さかい）論」として把握し、口伝と物質化を試みて、レコンキスタ（失地奪還／全てを失った場所で、もう一度たいせつなものをとりもどす）プロジェクトを持続しつつ、95 年 NIPAF' 95 に参加したセルジ . ペイ（仏）のパフォーマンスから受けた印象を展開し、03 年より「セルジ . ペイ頌歌シリーズ 」を発表している。2009 年 9 月第 1 回所沢ビエンナーレ美術展引込線（所沢）
4th 街かど美術館 2009 アート＠つちざわ土澤（岩手県花巻市）
2012 年 6 月「池上晃事件補遺 No5　刺客の風景」（長野県伊那北高校薫ヶ丘会館）
7 月「くりかえし対立する世界で白い壁はくりかえしあらわれる 固有時と固有地」連作 No７（長野市松代大本営地下壕跡）
2015 年 Nine Dragon Heads(韓国) のメンバー企画として第 56 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展にて展示。
同年 7 月、Nine Dragon Heads に参加。韓国水原市に Void house(なにもない家) を制作した。
2016 年 6 月「いばるな物語」連作の現場制作。　伊那北高校薫ケ丘会館
2016 年 10 月個展「段丘地　四徳　折草　平鈴」アンフォルメル中川村美術館（長野県上伊那郡中川村）
2017 年 9 月 :Nine Dragon Heads(韓国) の TASTE of TEA の企画として第 15 回イスタンブール・ビエンナーレにて Void house 連作を制作。
2017 年 11 月 ~12 月 : ナガノオルタナティブ 2017「Prevention」05 北澤一伯展「場所の仕事」にて "光の筏" を現場制作。FLATFILESLASH/ Warehouse GALLERY（長野県長野市）

煙草と大福

Yu OYA 1989~
大谷祐

街なかに
しゃがんで
煙草をふかしている
きみ

街なかに
しゃがんで
大福をほおばる
きみ

おなじかたちの
きみのなかに
まったくちがう
きみがいた

煙にまみれていく

粉にまみれていく

向けられた瞳は
見透かすように
口に含まれ
消えていく

純粋と純粋のあいだにある
きみの輪郭を
そっとなぞって

大福も煙草も
きみの指のなかで
愛撫されて

大谷祐 Yu Oya
1989 年群馬県生まれ
詩人
info@oya-u.com
http://oya-u.com

旅立ち

Shigemichi BINNAKA 1941~
備仲臣道

一

温突の上は気持ちがいい。ぴかぴか光った床に寝ころぶと、夏の昼寝には冷たくってとても涼しかった。前の家に温突はなかったし、ここへきたのはついこの春だから、ぼくは暖かい温突を知らないけれど、冬は火をたいた煙が床の下を通って部屋中がほかほかしているらしい。

もうすぐお昼だな、と思った。ご飯はなんだろう。卵かけご飯もあきたから、ライスカレーが食べたいと思ったけれど、あれはご馳走なんだから、だめだろうな。ついこの間、お隣りのおばあさんのお葬式があったとき、近所中の子どもたちだけ一部屋に集めてライスカレーを食べさせてもらった。お葬式はなんだか気味が悪くていやだったが、ライスカレーはおいしかった。

お母さんがお昼を呼びにこないのはどうしたのか知ら。しかたがないからもう少し横になっていようと思う。

きれいに塗った土に油紙が貼ってあって、鈍く茶色に光る床の上に、籐の枕をして寝ているぼくが、あれが六十数年前の四歳の私である。朝鮮忠清南道大田の中心部をはずれてやや高くなった、当時は春日町三丁目と呼ばれていた一帯の、丘を背にした家に住んでいた。この日は一九四五年八月十五日で、隣りの部屋のラジオの前に、母の静子が弟の征二を膝に抱いて座っていた。祖母のトヨはどこかへ出かけていていなかった。することがないから、ほとんど毎日を出歩いては遊び暮らしている。

遠くで聞く波の音のような雑音の向こうから、甲高い間延びした節回しの男の声がとぎれとぎれに聞えていた。前もって言われていた重大放送であったが、こう聞き取りにくくてはなんのことか判らない。それでも、あらかたの予想がつかなかったわけではないので、静子はあれこれと頭をめぐらせて見て、やっと一つの結論に達した。日本はどうも戦争に負けたらしいから、南方のどこか知らない所へいかされている夫は、十中八九帰ってこないのに違いない。

「しげ坊」

静子は急に叫んで、温突にいる息子を呼んだ。すでに涙声である。

呼ばれたから、ぼくははっとしてお母さんの所へいった。お母さんはしょぼしょぼした目をして、おいで――と言った。そうして、ぼくのくりくりの頭を抱き寄せ、征二と二人を膝に乗せたまま泣き出した。こんな風にお母さんに抱いてもらうのははじめてだと思う。いつもは征二しか膝に乗せなかった。

「お父さんはねえ」と言ってお母さんはしゃくり上げた。「お父さんはもう帰っていらっしゃらないかも知れないのよ」

「どうして」

「生きているかどうか…」

静子は黙り込んだ。長い沈黙のときが、暑い部屋のやり場のない空気をなおさらに重くしていた。開け放った縁側の向こうの右半分に大田の市街が見え、左の湖南線の線路近くにある並木で、あるかなしかの風に葉裏を返したポプラがぴかっと光った。

しばらくのときがたってから、静子のぼんやりとした頭の中に、もうここに住んでいられないのではないかという危惧が浮かんできた。自分たちは余所者で、ここが他人の国であるということに思い至ると、思わず水を浴びたような気になったらしい。二人の子を抱きしめている手に力を入れ、あとは呆けたように遠くを見ているしかなかった。こちらへきてから生まれた静子には、帰るべき故郷というものが思い浮かばない。

夕方近くなって、かたかたとせわしない下駄の音をさせてトヨが帰ってきた。

「聞いてのとおりじゃ。薄々は誰でも感じとったかも知れんが、えらいことになってしもうた。ついこの間までは、南北の両側から敵にはさまれても十二月まで持ちこたえればなんとか血路が開けて、日本が盛り返すじゃろうと言うとったのじゃが、とうとう神風も吹かんじゃった。こう早く負けようとはのう。どげんしたもんじゃろか。玉太郎は戦地にいっておって留守じゃというに。なんまいだぶ、なんまいだぶ」

「お母さん」静子がきっとなった顔で言った。「父がいますから、これから冨士さんへいって相談してきます。そのうえで身の振り方を決めましょ。確か、お国の大阪には、なんにもないんでしたね」

「こげなときになって、きつかこと言わんでもよか。もうせん言うてあるとおりじゃ。備仲の家は泰次郎さん代で無一物になってしもうたと。それで、一人身になった玉太郎をわしが引き取って…」

「その先は何度も伺いました。もうたくさん」

「それに、わしの出は博多じゃが、向こうにも頼りにできるような者なおらんと」

トヨはふんっと言った顔で言って、口をへの字に曲げた。

静子の父・山本数太郎は、すぐ近くの冨士家にいた。数太郎・シズノ、それに弟の吉和の一家は丸抱えのように冨士家に寄食している。玉太郎が出征する際、社長の冨士平との間に、そういう約束があったらしい。静子たちがいまの家に移ったのもそのためだったが、細かい所までは知らされていない。ただ、男同士の友情とだけ思って今日まできた。

冨士家から帰ってくると、静子は人が違ったように振る舞って、姑のトヨに君臨するような口の利き方をした。

「尾道に家が買ってあるそうですから、私たちはそちらへいって、玉太郎さんの帰りを待つことにします。お母さんはどうなさいますの」

「まあ、いますぐということでもなかじゃろう。ゆっくり考えることにするたい」

トヨは苦いものでもかんだような顔をしたけれど、それきり黙り込んだ。

その夜中、トヨはがばと寝床に跳ね起きた。うめき声を上げたようでしばらくは天井を見上げていたが、太い息をついて部屋を見回した。八畳の部屋のトヨの左に私が寝て、征二を抱いた静子が背を向けて横になっていた。

「鳥が…」トヨはつぶやいた。「大きな鳥じゃった。屋根棟をくわえて、この家ごと持っていかれるとこじゃった。気色の悪か夢を見たもんじゃ。こりゃあ、お迎えが近いとかも知れんたい。でもまあ、こっちへきてから、ずい分と良か思いばさせてもらったとじゃ。この辺でお仕舞いになっても、元は無一文じゃったもん、なんの惜しかこともなか。わしの一生はこんなもんじゃろう」

体を長くしてしばらくはもぞもぞとしていたが、それきり静かになった。すでに夜明けに近いらしかったけれど、じいんという地虫の鳴くような音のほかになにも聞えなかった。

二

きょうは朝からお母さんのご機嫌が悪かった。なんにもしないで、外の景色をぼおっと見ている。おばあさんは、朝ご飯がすむと、いつものようにどこかへ出かけていったきり帰らない。つまらないから、隣りのむっちゃんと裏の丘へ遊びにいくことにした。いつだったか、大きな穴に水が溜まった所へ征二が落ちて溺れそうになってから、いってはいけないと言われていたけれど、ぼくとむっちゃんはいつものように、鉄条網の破れた所をくぐって入り込んだ。この小さな山は誰かの持ち物だからときどきは山番がいて、お母さんと毘麻を取りにきた日、見つかって怒られたことがあった。草笛をならったこともあったけれど、あれは、そのときではなくて、むっちゃんのお兄さんが京城の大学から帰っていた春だったような気がする。

少し登った所に小さな木があって、涼しい日陰を作っているから座って遊ぶ場所にしていた。先にむっちゃんが気がついてぼくの手を引っぱった。

「しげちゃん、変だよ。見て、刀だよ、あれ」

言われてそっちを見たら、木の下の草むらの中に刀が一本突き立っていて、ぴかぴかと光っていた。丘の下の小さな土橋を渡った所に森田さんという軍医さんのおうちがあって、森田さんは大きな体から下げた重そうな軍刀を、いつもゆらゆらさせながら歩いていた。抜いて見せてくれたのを、こわごわと見たのと同じように光っている。

蝿かなにか黒い虫が周りをぶんぶんと飛んでいるらしかった。鳥肌が立つようで、なにか判らないけれど怖い。むっちゃんも、泣きべそをかいて帰ろうと言い出したから、おうちへもどった。お母さんにそのことを話したら、少しの間、眉を寄せていたけれど、急にはっきりした声で言った。

「あっちへいっちゃいけないって言ったでしょ」

「だって、つまんないんだもん。ねえねえ、あれはなんなの」

「いいの。子どもはそんなもの見なくっても」言いかけて急に笑顔に変わり

「誰かがなにか見つけて目印に立てておいたの。きっとそうよ」

それっきり黙って、いっそう暗い顔になった。

お昼を過ぎてから、お父さんの新聞社からお使いの人がきた。いつもなら上がって話していくのに玄関に立ったままで、ぼそぼそと話している。

「朝鮮人が大勢で社長室へ押しかけてきましてね、新聞社を譲れ、この誓約書に判をつけ、と言って迫りました」

「それで社長さんはどうしましたの」

「しかたないから判をつきましたよ。あの騒ぎで断ったら殺されていたかも知れません。倉庫や社屋の鍵もみんな取られてしまいました。あしたからは、あの郭哲朱が社長だそうで、独立運動で処刑された男の息子かなんか知りませんが、英雄気取りでしてね。鼻持ちならないったらありゃあしません」

そんな話をお母さんの隣りでぼくも聞いた。どういうことなのかは判らないけれど、大変なことになっているらしい。大人たちはみんなこわごわと小さくなっているように見える。

「社長さんはご無事だったのね」

こそこそ帰っていくお使いの人を追っかけるようにお母さんが聞いた。

それから、お母さんは部屋へ帰ってへなへなと座り込んで、またぼんやりとしたままなにもしない。

部屋から見下ろした京釜線の線路にも、その向こうを左へ走っている湖南線にも、ついこの間までは屋根の上にいっぱいの朝鮮人が乗っていたのに、きょうはそうではなくて、ちゃんと中に乗っているらしい。窓からあふれるようなたくさんの人たちの白衣が日を跳ね返して、そこいらが明るく見えた。風に乗って、わあわあと騒ぐ声が聞えてくるのは、その人たちなのか、それとも街のほうからくるのか知ら。でも、日本人ばかりのぼくのおうちの辺りは、真昼だというのにしいんとしている。

夕方早くおばあさんが帰ってきて、なんだかぶりぶりしていた。

「街は大変じゃそうな。駅前も本町の辺りも朝鮮人があふれ出して、行列を作って歩き回わっとる。独立じゃ、独立じゃ言うて。監獄所から出てきたばかりの政治犯を先頭に押し立ててからに、いままで小さくなっとった者が大きな顔をしくさって…」

「さっき新聞社から人がきて、社も朝鮮人の手に渡ったそうです」

「なんとしたことじゃ。それで社長さんは無事じゃったろうな」

そうかそうか、お母さんから話を聞いたおばあさんは、自分の部屋へ入っていって、なにか片づけはじめたらしかった。こっちへ見せた背中が小さくて、お母さんほどではないにしても、やっぱり元気がない。

三

日本のおうちへ帰ると言われたって、どういうことなのか判らない。それではいまいるここはなんなのだろう。お母さんに聞いても、おばあちゃんもうるさそうに首を振るばかりで教えてくれない。

春の終わりころ、少し離れた所へ遊びにいって雨に降られた。お母さんが迎えにきてくれて帰る途中、濡れながら歩いている子がいた。

「お母さん、あの子にこの傘貸して上げようよ。ぼくはお母さんと一緒でいいじゃない」

「お友だちなの」

「うん、時々遊んだことがあるよ。金本君さ」

「金本？」お母さんは顔をしかめて、そうして言った。「半島人ね。放っておきなさい」

見上げた顔が怖かった。半島人ってなんだろう。言葉つきは少しおかしいけれど、顔だって僕と同じような顔をしているのに、どうして違うのか知ら。それに金本君が半島人なら、なんで濡れていてもかまわないのだろうか。お母さんの言うことが判らない。ぼくたちはいったいなんなのだろう。

それから間もなくアメリカ占領軍は十月までの日を限って、日本人は一人も残さず帰国するように布告を出した。はじめ、荷物として一人当たり行李二個という制限が、リュックサック一個に変更されて、日本人をあわてさせた。現金も一人千円までということである。私たち一家の荷造りも忙しくなっていったけれど、二十年の余も暮らしてきたものが、リュックサック一個と千円にまとまるわけがないのは占領軍も先刻承知のはずで、つまりは在朝日本人に財産の放棄を強いるものにほかならなかった。けれども、食い詰め者の日本人が、植民地宗主国の強権を笠に着てやってきて、悪どく蓄財したものがそれらであってみれば、本来、無一物になっても止むを得ない。もっと言えば、奪い取ったものを返し、罪をつぐなってのち帰るのが道理というものでありながら、日本人の一人としてそう考えたものはなかったようである。

八月の末になって、外から帰ってきたトヨが言った。

「大田駅の向こうに理研という工場があるじゃろうが、あの工場で拡張工事をしておった親方の田中角栄というのが、これがまだ三十前の若僧だというが、大変な羽振りだったそうじゃ。日本が負けたのを知ると、あっという間に財産をまとめて、なんとあんた、五万円という大枚を払って船を雇ったそうな。その船に朝鮮での一切合財を積み込んで、さっさと新潟へ帰ってしもうたと言うぞ。なんちゅうた早業じゃろか。このごろは、こんなこすいやつの話ばっかりでいやになるわ」

「京城のお役人連中も、奥さんや子どもにお金や貴金属を持たせて、さっさと国へ帰らせているそうじゃないですか。大田でも同じような噂で持ちきりだって、この前、新聞社からきた人が言ってましたっけ」

静子もいまいましげに言った。

そう言われた官吏たちも、八月十五日までは敗戦のことを知らさられておらず、毎夜毎夜の接待づくしで酒色に溺れていたらしかった。軍もまた同じようではあったけれど、十五日正午の放送以後いち早く行動したのは、軍人家族の営内への収容と、軍用車を使っての物資の隠匿だけであった。

九月になってすぐ、朝鮮総督の阿部信行が一人飛行機に乗って日本へ帰ってしまった。最高責任者の逃亡に象徴される朝鮮総督府の混乱とサボタージュは、本来彼らが指揮すべき在朝日本人の引き揚げにおびただしい遅れをもたらして、日本人社会のパニックに輪をかけることになった。

四

きょう新聞社の人がきて、ぼくに真桑瓜をくれた。さっきまで冷やしてあったそうで、少しあまくって冷たい。このマッカともさよならするのだろうか。ぼくは、あんこが大好きだったのに、中田堂の温突まんじゅうも食べられなくなるのだろう。工場へ入っていくと、おじさんが、敬礼――と号令をかけるから、両足をそろえて右手をおでこの所に当ててじっとしている。

「よし、しげ坊はいい兵隊になるぞ」

いつもそう言っては、あんこをごほうびにくれた。

中田堂や花屋旅館や新聞社の庭で遊んだチョコマンはどうしているか知ら。ぼくを見ると遠くからでも走ってきて、夢中で組みついたあいつとも、もうずっと遊んでいないけれど、きっとこのままお別れするのだろう。新聞社までは大田橋を渡ってからまだ遠くて、ぼく一人ではいかれやしない。お母さんもおばあさんも忙しくってつれていってはくれないのに違いない。

総督府の引き揚げ事業がいっこうにはかどらないのにしびれを切らして、民間では世話会という組織が各地にできていった。在朝日本人が自身では持ち帰れない家財や動産を預かって、日本に運ぶということであった。とは言っても、アメリカ占領軍支配下の厳しい制限の中で、確かな輸送手段があるかどうかは判らない。それは判らないけれど、ほかに方法がないいまとなっては、ただそれにすがる思いであった。大田にも世話会ができたと聞いて静子はすべてを託すことにし、夫の部下に一切を頼んだ。

このところ、トヨは毎日出かけるたびになにかを持ち出しては、大事にしていた三味線や鼓をはじめとするものを売り払って、ほとんど身一つに近いところにまでなっていた。さばさばした顔をしているのは、修羅場をいくつもくぐってきたからに違いない。生まれて間もなく親と離されたらしくもあり、縁者のいる博多にも帰っていけないわけがあるのは、日ごろ口の端からきれぎれにこぼれていたので、周囲の者もおぼろげながらには知っていた。

そんなある日の朝早く、冨士家から使いの者がきて、かつては李何某が曳いていた人力車が差し向けられた。静子は二人の子をトヨに押しつけ、緊張して出ていったけれど、昼近くなってほかほかしたような表情でもどってきた。

「なんの用じゃったと」

「新聞社も人手に渡ったことだし、きりはつけなければと、そういうお話でした」

「それで…」トヨはずるそうに上目を使って言った。「応分のものを下さったというわけじゃな」

言い当てられて静子は思わず懐を押え、しまったと心の中でつぶやいたようである。

「退職金をいただきました。けれど、これはこれからどうなるか判らない暮らしのために取っておかねばなりません。それに、玉太郎さんも帰って見えるやらどうやら…」

「そうじゃな」

トヨが簡単に引き下がったのが、静子にはかえって気味悪いらしかった。

九月になってから何日かたっても、世話会からはなにも言ってこなかった。むろん、行政の方からの連絡などは八月十五日以来あったためしがない。

十月になって世話会の者がきて、荷物を引き取る打ち合わせがあった。そのとき、大田の日本人は十月下旬、地区別に班を編成して大田駅から京釜線に乗り、釜山からは引き揚げ船「雲仙丸」その他に乗船して、博多港へ向かうという説明があった。

十日ほどして二十四日午後四時、大田駅集合という連絡が入った。七十人を一班として貨物列車に分乗するという話である。うまくいけば、二十六日には日本の土を踏める。

その二十四日午後、備仲家の四人は早めに家を出た。静子は着られるだけの着物を重ねたから丸々と太っていた。退職金の札束は見つからないように弁当箱の底に入れ、上へご飯を詰めた。トヨの入れ知恵である。二人の子はよそゆきの服がだぶだぶで、首のカラーを苦しそうにしている。着物の裾をもんぺに突っ込んで、風呂敷包みを背負ってはいるけれど、ほかの引き揚げ者から見たら、トヨは手ぶら同然のお気楽な姿に見られた。

「よう考えて見い、二十六年前にきたときにゃ、ほとんど無一物じゃった。それがどうじゃ、五歳だった玉太郎は大きゅうなって、なんとか出世したと言ってええじゃろう、中鮮日報の編集長にまでなったとじゃもんな。家も持ったし、嫁もくれば、孫も二人までいる。みんな、この国に儲けさしてもろうたも同然じゃ。しかし、無一文できた身が、また同じような身上で、落ち着くあてのない国へ帰る。わしらはいったいなんじゃったのじゃろう。悪い夢でも見ておったというのじゃろうか」

独り言を言って静子からにらまれた。

人がひしめくプラットホームに、鉄のこすれ合ういやな音をさせて貨物列車が入ってきた。私はトヨに手を取られてホームと貨車のすき間をまたいだ。

ここから旅がはじまったと言っていい。それが多難なものであろうと、四歳は四歳なりに、背に十字架を引き受けなければならないはずだから、それを背負っている。背中のものがなにかを知り、それに身をもって結果を出す日まで、いくら重くてもしようがない。

こうして、ぼくのなれの果てたる私は、自身の原罪のありかを見すえている。ときはまさに八月十五日、加害の終焉の記念日である。

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941~
韓国忠清南道大田生まれ 著述業
甲府第一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書 『蘇る朝鮮文化』（明石書店）『高句麗残照』（批評社）『司馬遼太郎と朝鮮』（批評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会批評社）『内田百閒文学散歩』（皓星社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagune@yahoo.co.jp

080414 / Digital Photograph by Tetsuya Machida

不埒基本ノ地

Tetsuya MACHIDA 1958~
町田哲也

９０年代後半のゴルフ場建設の際に十三メートルの泥炭層は十万年前から其処に在ると調査観測された湿原には、逆谷地（さかさやち）という変梃な名がつけられている。界隈の流水はすべて東への山麓側へ流れるが、この湿原の水だけは西の山体側に流れだしていること（そのように伺える傾斜があること）がその由緒だという。地名も然る事だが、尾瀬は九千年、釧路の三千年、一万年前後のこの国の湿原と比較すると、湿原堆積の悠久は、四ヘクタールの小狭さだけでない絶妙な地勢によって保たれたのだろう。入口には今世紀になって説明板が立てられテラス状の遊歩道が拵えてあり、つまり侵入する場所を限定して自治体（県）が保全している。近くに県の環境保全センターがあってこの地を継続調査対象としている。湿原も施設もこちらの知る限り訪れる人は少ないが、施設の学芸員は近隣の各所と連携して獣個体や地勢植生などに対して真摯な活動を継続している。唐松や広葉樹に囲まれぽっかり広がるミズゴケに覆われた特異地は耕作や宅地には適さない湿原であったことから過去より人の手が伸ばされず、気象や天変にも流されずに遺されたが今後はゴルフボールが堆積に混入するかもしれない。その脇にわたしは生を横たえることになり、この十万年の堆積の横の草木に指を伸ばし背も伸ばし、風で折れ落ちた樹木の枝を拾って振り回し、投げ落とし蹴ったりもしてふらふらと歩き、近場の似たような湿地に好んで踏み入ることもあるからだろう、場所の印象というよりも場所そのものの醸す磁性のようなものが、時折加算飽和して圧縮された場の時空が一気に軀に浸透してくる、軀が場所の性質に浸食されてしまったかの体感を得る。季節によっては獰猛でもある場の力に慣れない頃は、なにやら軀を強ばらせ身を時空に投げ出す意気地が萎えていたが、がに股のリスが足下を走り抜け頭上をムササビが颯爽と落下する出会いなどが浸食に加担するようになると眇たる怖れが退いて、こちらがこの場に固有であるには如何にあるべきかと自らのトータルな意味での身だしなみを振り返ることになる。

距離的には五百メートルほどだから窓から望める筈だが山襞の隆起と樹々が邪魔をして目視はできない「彼処」の気配に対して、地下を透視すれば時間の堆積を支えた構造があるに違いないと妄想の円錐地下断面図を勝手に往復し、焦点をアウトフォーカスさせる恣意のつもりで瞼を遠く放っては、また手元の作業に戻り、頤を頚に落とし添え弱く地中の溶解した植物が泥炭へと融けていった長大な時間に関心を屡々柔らかく奪われるように過ごす中、季節が雪に覆われていても、時間に追われるような作業の最中であっても、十万年という時間の何ものかに誘われて長靴か橇かを履こうという気持ちになる。夕暮れになればやおら夜空の光へ顎をあげ、あれは太古以上だと加え、タイムトラベルの実況生存かと呆れる始末を、生活の基本とする思索に従うことになる。

湿原の時間の軀への浸食はなんのことはない飯を喰うようなことだから、殊更神妙に捉えるわけではない。但し長々と此処に生を横たえた訳ではないこの身では腹を下すこともあり、足が湿原のミズクサ死骸に未だ、差し込まれていない浮身でもあり、机上のバイナリやデジタルの挙動に踊らされつつ、按手を真似て湿原やらに戻す工夫を重ねるしかない。必ずカメラをぶらさげた浸食の正体を見破る撮影歩行もこのところ何も持たない手ぶらが良いと巫山戯る風情が実は的を得ていた。ここ数十年の避暑別荘地開発される以前は、集落は形成されない高原で、炭焼きや鞣し作業の山小屋に独り現を抜かす山人が幻視できる程度であり、数百メートル標高を下った里には早くから田畠が広がり南北に走る交易路があり、つまり此処は謂わば人嫌いや罪人の逃げ込む地かもしれないと見回すと、近所付き合いの無い相応の余所者ばかり若干数が住まっている。

下諏訪の友人の所から垂直に駆け上がる林道の途中には、太古から遠方へ運ばれ実用的に重宝にされた黒曜石の湧く場所があり、パンクに気をつけろと言われつつ幾度か昇り降りした八島ヶ原は確か湿原の南限だった筈だと憶いだす。逆谷地より更に六百メートル以上高い標高の地で、観測では一万二千年の堆積の高層湿原で、1939 年に同地同様の車山、踊場と夫々個別に国の天然記念物に指定され、1960 年に霧ヶ峯湿原植物群落と纏められた。そもそも植物の泥炭化は、寒冷地において腐敗分解が遅延する（あるいは分解しない）故の成立因がある。愚図愚図と冷ややかな気温で気の遠くなる速度の時間を引き連れて堆積が続く。淡水が植物を浸す湖沼状態の低層湿原を経て、水が腐植酸により酸性に変化し、やがて繁茂するミズゴケのブルト、シュレンケ（微地形複合体）が高層湿原の堆積層となるという。過去にはこの泥炭を掘り出し星空の下、可燃性に気づいて赤々と燃え上がらせた人々がいたかもしれない。あるいは貯水と葉緑の細胞が交互に並ぶ生体構造の内に潜むペニシリウムなどの微生物が治療を促進し吸湿性も加わり止血治療薬として使われた太古からの刃傷沙汰が湿原に浮かぶ。

地中を北に走ると、ふたつの火山の間に鉄を多く含む鉱泉（炭酸泉）が至る所に出ていて、鉄を好む鉄バクテリアが繁殖し重炭酸鉄や硫化鉄を自らが酸化させて体内に褐鉄鉱を蓄積し、バクテリアの死骸が泥状の褐鉄鉱となって沈殿する鉱床が点在し、現在も県内唯一の鉱山として稼働している。なるほど春の水芭蕉の群生地の下は土も水も赤茶けている。褐鉄鉱は昨今のペットブームの脱臭に利用されているが、その色彩を顔料としても使われる。赤い河川の一見禍々しい眺めは実は浄化の作用があり、山麓には湧き水を求める場所もある。鉄に枯渇した戦中などは需要に応じた忙しさがこの鉱山にはあったという。産出物に照応した暮らしが山麓の柏原、古里にはあり鬼無里の麻同様田畠を離れる冬の副業として鎌鍛冶業が発達し鎌の生産が今でも続けられている。鍛冶は上杉の刀鍛冶がもたらしたという話もある。褐鉄鉱の浄化と高層湿原が重なり過去には鉱泉利用もあったこの地に身を置く以前は、太平洋に面した湾岸にて津波を怖れていた。

鼓膜が破れた錯覚に陥る無音の静まりの中で、秀れた文節を響かせる文字を辿る白い季節になると、内省的な観相と腹を括ったつもりの抑えた学びであっても、手元に集めた意識は雲散離脱して重力を解かれ上昇しているように舞う粉雪と成ってしまう奔放を戒める必要はない。見つめたか振り向いたかわからない喪失視座を散漫に揺らし、世界の他動と自動が入り交じったような遊戯の頸を傾げ、喉の奥妖しい文節を一呼吸で済ますような音読みが、なかなか発声に至らない。音響を加えると迷妄の穴へ吹かれ落ちてしまう幼気な怯えが消えないというのも悪くない。湿原の堆積層の時空の迫りと似た浸透が在る書物に出会い再会もする時、彼らの言葉を扱って全うした記録をみると、大凡彼らの思索生活には多様な歩きの時間が挟まれている。卓上で照らし合わせる執着ひとつでは「現生」に創成する現場に、瑞々しい意識がなかなか灯らないということだろう。頓挫と歩行の反復が身体を緩め、あるいは呼気に侵入する季節や気配も慎重な思索を無邪気に野に放って、あるいは垂直と水平だけでない風のしなやかな曲線を含む寛容が、蓄積と反復を思いもしなかった状態へ連れ出すというわけかと湿原を振り返り、言語の観念堆積と湿原や星空の時間の浸食差異を測るつもりで、鉛筆を持ち、素描をはじめていた。

町田哲也 Tetsuya Machida 1958 年長野市生まれ
ブランチング企画責任・クマサ計画
http://machidatetsuya.com

もぐらたたき

Tatsuki TSUKADA 1990~
塚田辰樹

私は最近になって数回、モグラに襲われるという経験をしているが、まあ無視すればいいだろうと考えていた。しかし夜中に襲撃してくるとは思わず、かつそのショックがデカかったせいで、その翌日には、池袋の雑居ビルの路地裏に位置する、何ともわかりにくい場所の、とある診療所にいた。やはり人目に触れにくいと助かる人もいるからだろうか。

人は誰でもモグラを飼っている。そのモグラとの関係次第で、ここへ来る必要性が決まる。

エレベーターを出るとすぐに受付があり、保険証を提出した。応対した女性の後ろには、コの字型に大きくスペースが取られており。常に 5,6 人の担当者が、その中で常駐している。皆若く、女性でも安心して通えるというふれこみ通り、半数以上が女性だった。

診察ボード記入の説明を受けながら、昨夜のトラブルを思い出す。寝付けないでいると、急に激しい目眩と動悸に襲われたのだ。呼吸もままならなかった。その後 2、3 時間眠ることができず、大病ではないかと恐怖に震えた。死ぬかと思うほど苦しかったからだ。症状で病名を検索したところ、はっきりしないがどうやら心因性の線が強いようだった。急いで心療内科を探したが、何しろ休日であるため、休診ばかり。結局、池袋くんだりまでやってきたのは、最寄りの診療所は口コミの星が一つだったからでもある。

ひととおりのやりとりを進めるが、担当女性がどうも視線が泳いでいる。こちらの精神がおかしくて診察を受けに来ているのに。だいじょうぶか。一抹の不安を抱えながらも、待合スペースに座り、チラチラと周りの様子を窺うが、想像していたような落ち着きのない人、妙な言動を繰り返す人はおらず、みな問題のない人たちに見える。私と同じように平静を装っているが、本当は狼狽と困惑で胸がいっぱいなのかもしれない。

個室へ通されると若い医師と対面した。雑居ビルの 2 階にあるため、診察室は正直せまい。昨今の心療内科の増加で、ネットで検索しただけでかなりの診療所が見つかった。日曜日に診察している場所で、信用できそうな所はここぐらいのものだったので助かった。狭いことは苦にならないが、医師が何しろ早口で説明する。その理由は通院してわかったが、一人の患者につき、診察時間は短時間しか割り当てられない。ニーズがあるため、出来るだけ多くの患者を裁かなくてはならないためだろう。しかし映画で見るような、革の大きな椅子に腰を掛けたかった。あれはカウンセリングだったか。

発作が起こる前触れには "自分の体が自分のものでなく感じる" ことがある。"自分の体がゲシュタルト崩壊していく感じ"。

そう伝えるには、若干の戸惑いがあった。通常の診察室では「ノドが痛い」「頭が痛い」などの説明しかしたことがなかった私には、抽象的で曖昧な説明をせざるをえない状況に、違和感があり、恥ずかしくもあった。

しかしここでは、医師はその話をすんなり受け入れ、「自律神経失調症」と診断した。

ただそれは、発作の症状から得た結果だという。"自分の体が自分のものでなく感じる事がある" については「離人症」とまではいかないようなので、まあ大丈夫でしょう。と曖昧だった。結局ストレスを上手く掃けていくことが、生活において重要になるらしい。

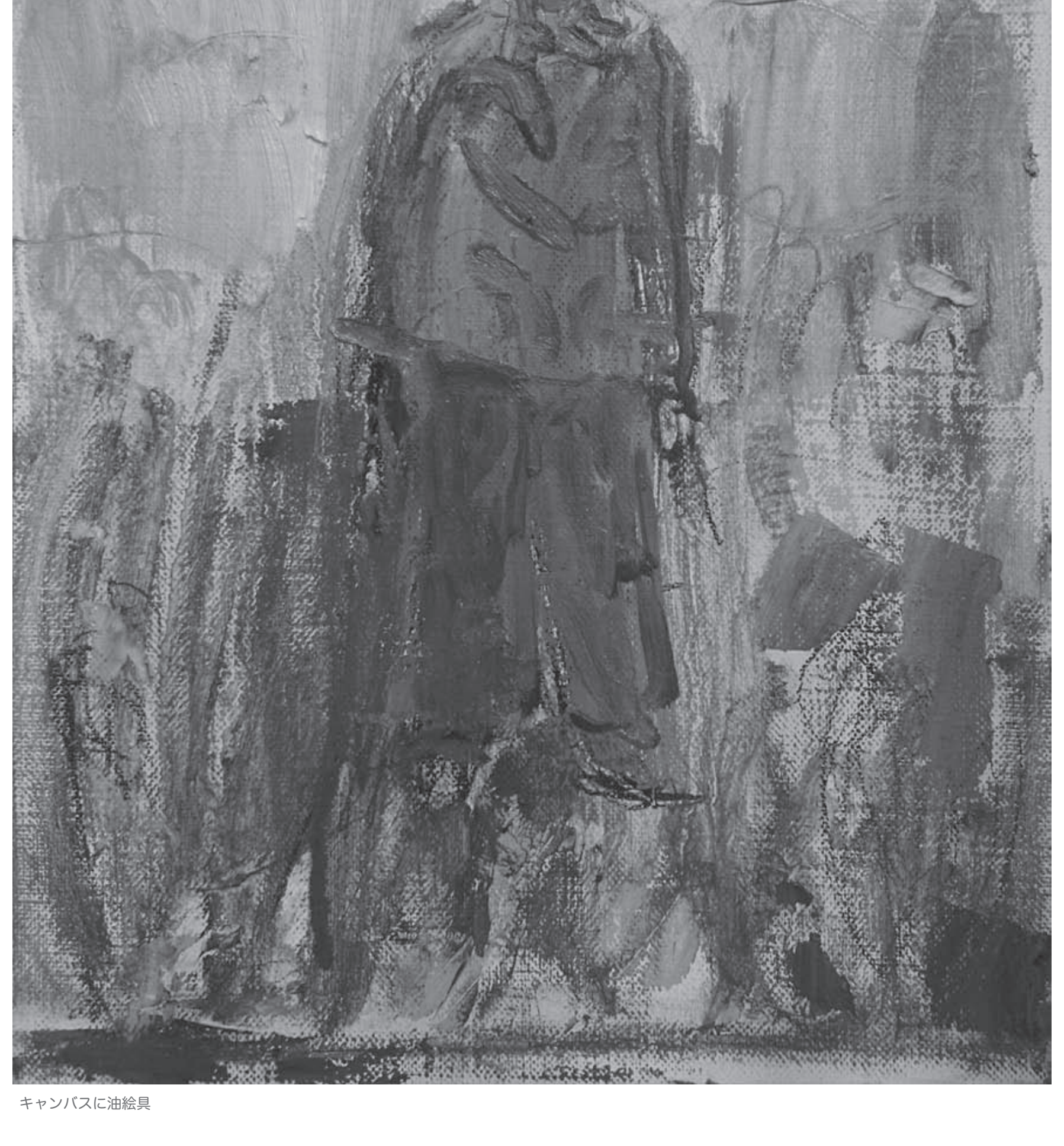
ひとまず抗不安薬を処方してもらうことになった。"不安" を感じたときに服用することでパニックを押さえられるらしい。ただ医師曰く「もぐらたたきのようなもの」で、発作がモグラだとすれば、それに対して薬を服用し、叩いて落ち着かせる事はできる。だがモグラそのものは、ずっと土の下にいるので、ストレスの原因を探り、解消することが肝要であるとのことだった。

ストレス……。やはり大雑把な原因に落ち着いた。いや原因はストレスの元だ。仕事？制作？人間関係？生活習慣？そもそも解消の仕方がわからない。なんなら全ての病気はストレスが原因か、あるいは関係して起きているような気さえするので、なにも心因性の病気にかかる必要なんてなかったのに、と運命を恨む。だが自宅へ戻ると、少しだけ安心した。昨夜のような発作で、眠れなくなるということはないだろう。ハンマーはいつでも構えられるということだ。

しばらくして周囲の話を聞くと、意外と自律神経失調症を患う人は多いことがわかった。知り合いも、知り合いの知り合いも、同じように変調をきたしている。わりとオーソドックスな病気だと知った。が、なんとそれは「早く寝る」だとか「気のせいと無視した」とかで回復している。モグラを軽くいなして平然としている人たちのように感じるが、話している中で大体は私に重く受け止めないように助言してくれたり、気を遣ってくれているのだと感じる。

「まあ、仕事してればそういうこともありますよ。」「生きてりゃ色々あるからね。」「いつか死ぬんですから。」「キャバクラ行く？」

塚田辰樹　Tatsuki Tsukada
1986 年長野市生まれ
川口市在住
DTP オペレーター /DTP デザイナー



キャンバスに油絵具

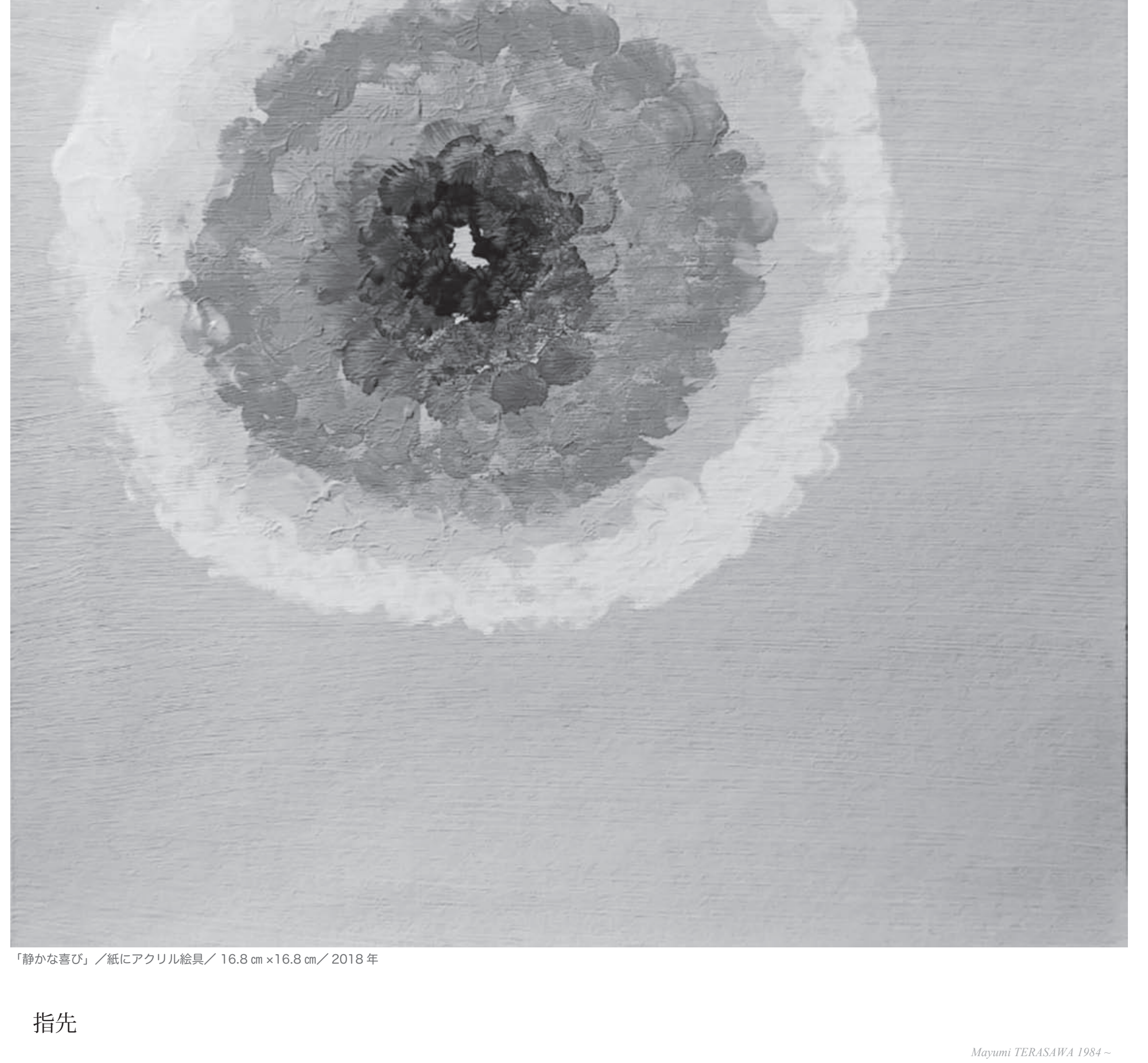
日記 (2018 年 2 月 25 日)

Yoshiaki HIKITA 1994~
疋田義明

遠く向かい岸に乗った四角い建物が小さくぽつぽつと、水平線上に見えていました。点々とちぎられたような雲が空の青い中を流れていて、氷の覆った湖面が青白くありました。氷の表面は白く泡立つような亀裂が所々に通っているのが見えました。地上を占める広がった氷から発せられる、皮膚に染み込んでくる冷気の中で、ぼんやりと向こう岸まで続く氷の亀裂を眺めていますと。白くうねりながら伸びる蛇の死骸のようにも思われるようでした。

どこか心細く向こう岸に伸びる亀裂は、本当にあちらまで繋がっているのか、途中で途切れてしまいそうな不安によってかえって向こう岸へと意識が持っていかれるように思いました。

疋田義明　Yoshiaki Hikita
1992 年長野市生まれ
画家（無職）
2015 年武蔵野美術大学油絵学科卒業
2018 年 4 月疋田義明点 / トポス I 高地 @ アリコ・ルージュ



「静かな喜び」／紙にアクリル絵具／ 16.8 ㎝ ×16.8 ㎝／ 2018 年

指先

Mayumi TERASAWA 1984 ~
寺澤真佑美

今よりもずっと、小さな手をしていた幼い頃の記憶。
保育園で、指に絵の具をつけて絵を描く時間があった。
慎重に紙に指を押し付けて、ゆっくり離すと、きれいな丸が一つ、できた。
続けて「ぽん、ぽん」と押していく。
心がとても嬉しくなって出来上がった絵をしばらく、じっと見つめていた。
ドキドキして、嬉しかった。
私の指先。

寺澤真佑美 Mayumi Terasawa
1984 年生まれ
アーティスト
日々の生活のなかでマイペースに制作している。

分枝 branching
http://branching.jp
branching 24
publish : 09.March.2018
分枝 ブランチング 発行 : クマサ計画　〒389-1226 長野県上水内郡飯綱町川上 2755-950 phone: 026-405-7519